

# JACET-Kanto Newsletter

一般社団法人大学英語教育学会関東支部

September 30, 2015 No.5

## JACET 関東支部ニューズレター第 5 号 (WEB 版) 刊行に寄せて

支部長 木村松雄 (青山学院大学)

JACET 関東支部ニューズレター (WEB 版第 5 号) をお届け致します。関東支部ニューズレター委員会委員長の職はこれまで支部事務局幹事の高木亜希子先生 (青山学院大学) に併任の形で御願ひしてきましたが、新人事体制を組む必要性から、副支部長の佐野富士子先生 (横浜国立大学) をお願いすることとなりました。基盤を作って下さった高木亜希子先生には、そのご尽力に対し衷心より御礼を申し上げる次第です。また新委員長の佐野富士子先生には、その豊富な経験を生かしてさらに充実したニューズレターを作って頂きたい、副委員長の下山幸成先生 (東洋学園大学) と共に更なるご尽力を御願ひする次第です。本ニューズレターが無事刊行されますことは、委員長と副委員長を核とする委員会の先生方と関東支部を支え運営して下さる多くの先生方の不断のご理解とご尽力のお蔭と衷心より御礼申し上げる次第です。

2013 年度より学術研究発表は、「関東支部紀要」(JACET-KANTO Journal) に掲載し、それ以外の活動報告は本「ニューズレター (WEB 版)」(年 2 回刊行) に掲載しております。今回は、2015 年度の第 1 回目 (通算第 5 回目) のニューズレターとなります。

2015 年度上半期の活動で我々が最も力を注いだのは、「第 9 回 (2015 年度) JACET 関東支部大会 (青山学院英語教育研究センター後援)」でありました。大会テーマを「統合型英語教育における異文化間多様性 (Intercultural Diversity of Integrated Learning in English Education)」とし、「招待講演」(中山夏恵先生 (共愛学園前橋国際大学)・栗原文子先生 (中央大学)) と「全体シンポジウム」(森住衛先生 (大阪大学・桜美林大学・名誉教授)・塩澤正先生 (中部大学)・笹島茂先生 (東洋英和女学院大学)) が内容的に連動する新たな試みが功を奏し、全体として深い学びの

### 目次

・ 巻頭言 支部長：木村松雄 .....	1	・ 青山学院英語教育センター・JACET 関東支部共催講演会報告 支部会員：辻りこ・ 支部事務局幹事：高木亜希子 .....	14
・ 第 9 回支部大会報告 支部大会運営委員長：新井琢磨 .....	2	・ 支部紀要編集委員会からのお知らせ 支部紀要編集委員長：伊東弥香 .....	15
・ 第 1 回支部総会報告 支部事務局幹事：高木亜希子 .....	10	・ 事務局だより 支部事務局幹事：高木亜希子 .....	16
・ 月例研究会報告 月例研究委員会委員長：山本成代 .....	13		

場とすることができました。また基調講演は字幕翻訳家として名高い戸田奈津子氏にお願いし「字幕の後ろに見えるもの(What I see behind movie subtitles)」と題して様々な経験を生かした思い出に残る講演をして頂きました。参加者総数は昨年の300名を大きく上回る380名に至り、本年度の支部大会がいかに活況を呈したものであったかを物語っていました。JACET 前会長の神保尚武先生(早稲田大学)とJACET 新会長の寺内一先生(高千穂大学)のご挨拶、さらに会場校を代表しての折島正司先生(青山学院大学文学部長)のご挨拶も心に残る素晴らしいものでありました。

懇親会には歴代の会長と多くの賛助会員の皆様の他 JACET 名誉会長の小池生夫先生もご参加下さり、実に和やかなそして笑い声の絶えぬ初夏の宴となりました。ここに改めて第9回 JACET 関東支部大会を成功に導かれた大会運営委員長の 新井巧磨先生(早稲田大学)と副委員長の 山口高領先生(早稲田大学)、そして大会実行委員長の 高木亜希子先生(青山学院大学)を初めとする多くの先生方といつもお世話になっている賛助会員の皆様、そして会場を提供し全面的な支援をして下さった学校法人青山学院に衷心より御礼申し上げる次第です。

2016年度 JACET 支部大会(10周年記念)、2017年度 JACET 国際大会(関東支部担当)に向け、これより準備を開始致します。皆様方のさらなるご理解とご協力を御願い申し上げます。

## 第9回関東支部大会報告

支部大会運営委員長

新井巧磨(早稲田大学)

2015年7月12日(日)に、青山学院大学17号館に於いて、関東支部大会が開催されました。基調講演には映画字幕翻訳者の戸田奈津子先生

をお迎えし、『字幕の後ろに見えるもの(What I see behind movie subtitles)』というテーマでお話して頂きました。全体シンポジウムでは、大会テーマと同じ『統合型英語教育における異文化間多様性(Intercultural Diversity of Integrated Learning in English Education)』というテーマのもと、笹島茂先生(東洋英和女学院大学・教授)、塩澤正先生(中部大学・教授)、森住衛先生(大阪大学・桜美林大学・名誉教授)にご発表頂きました。また、招待講演として、中山夏恵先生(共愛学園前橋国際大学・准教授)と栗原文子先生(中央大学・教授)をお招きし、『グローバル化時代の英語教育－異文化間コミュニケーション能力育成の意義と課題(Intercultural Communicative Competence and Teaching English as a Foreign Language in the Globalized World)』というタイトルでお話して頂きました。

また、今大会に限り大会参加費を無料にしたこと、そして好天に恵まれたこともあり、400名近い方々にご参加頂くことができました。

来年度は第10回の記念大会となります。より大勢の方々にご来場頂き、より一層ご満足頂けるようなものにしていければと存じます。

以下は、各発表の後記です。司会の先生方にご執筆頂きました。ご協力に感謝申し上げます。

### ■基調講演■

字幕の後ろに見えるもの

What I see behind movie subtitles

戸田 奈津子 氏(映画字幕翻訳者)

東京都の出身。津田塾大学英文科を卒業。当時好きな映画と英語を生かせる職業である映画字幕作りを志すが門はなかったため、短期間のOL生活やフリーの翻訳等をしながら機会を待った。念願叶って1970年に「野生の少年」「小さな約束」等の字幕翻訳を手掛ける。その後10年近い下積

みを経て、1980年、フランシス・コッポラ監督の「地獄の黙示録」の字幕を担当することで、本格的なプロとなり、同時に通訳もこなすようになる。以来、1500本以上の作品を、弟子を取らず一人で手掛けてきた。講演は、参加者の中に多くの学生や一般の方々が含まれている点を鑑み、英語字幕翻訳に掛ける戸田氏の人生論が時系列で紹介され、その都度如何に生きるべきか等、聞者に勇気を与える内容であった。全体を通して、1.モチベーションの大切さ、2.自分の好きなことを発見し伸ばすこと、3.基礎の大切さ、書くことの大切さ、4.英語学習は4技能の統合とバランスが重要である等が特に大切であると強調された。第一線で活躍し続ける戸田氏の基調講演は正しく「打てば響く鐘」そのものであった。益々の御活躍をお祈り申し上げたい。(木村松雄・青山学院大学)

#### ■全体シンポジウム■

統合型英語教育における異文化間多様性

#### Intercultural Diversity of Integrated Learning in English Education

森住 衛 氏 (大阪大学・桜美林大学名誉教授、  
JACET 元会長)

塩澤 正 氏 (中部大学)

笹島 茂 氏 (東洋英和女学院大学)

●森住衛氏：「今を含めこれからの日本の英語教育のあるべき姿を「文化」から提案して頂きたい」とした上で、1. 明治以来の「文化 (culture)」の辞書的定義 (例「文化」=「教養」) の紹介、2. 「文化」を取り上げる際の観点、即ち「文化観」の検証、3. 外国語 (英語) 教科で文化を教える (=「文化教育」) 際の留意点と具体的事例の紹介、4. 外国語 (英語科) と他教科との「文化」と扱いの相違、文化を教えるための外国語 (英語) 要請や普及の研修等の紹介、を 13 ページに

わたる詳細な資料を基に熱く語られた。

●塩澤正氏：「統合型英語教育には 4 技能の内容の統合という意味合いがあるが、(異)文化理解 (cultural understanding) を含めた統合学習と理解したい」とした上で、「はじめに」において、「言語というコミュニケーションの道具の使い方を教える場合に、自文化の思考構造を脱却し、異文化を理解するための新しい発想を身に付け、双方を取り入れた新しい考え方や表現方法を身に付けられない限り、本当の意味での文化間コミュニケーションはできない (塩澤 2011)」を核に、(大谷 2007)、Council of Europe、MLA、(鳥飼 2014)、ELP 等の資料を紹介し、「言語と文化は一体化するものである」とした。その上で、1. 異文化理解とは、2. 英語教育の関係で何を扱うのか? 3. どうやって要請するのか等の観点から詳細な説明と具体的な提案 (方法論 1-6) をされた。

●笹島茂氏：「「interculturality (文化間性)」の育成は、CLIL の目的のひとつであり、CLIL の基盤である「統合学習 (integrated learning)」と関連する」とした上で、英語教育の多様化が進んでいるにも関わらず、明治以来の英語教育の伝統のもとに大きな変革が起こりにくい状況下において、「統合」という観点から言語や文化の意味やその扱いを改めて議論する必要がある、CLIL の実践と理論的研究が命題への回答になる可能性が大きいことを強調された。

グローバル化が加速する中でのこれからの英語教育は、車の両輪として、“how to teach and learn” は当然のこととして、なおそれ以上に、“what to teach and learn” が重要な教育の対象になっていくことが予測され、改めて英語教育における「文化」や「異文化間理解教育」の在り方が重要な検討課題になることを、先の招待講演と本全体シンポジウムから深く学ぶことができた。そして、各講師から投げ掛けられた様々な命題への確かな回答は、既存の枠組みの踏襲であったり、

組み換えの繰り返しではもはや得ることは難しいと感じた。「統合型英語教育における異文化間多様性」の追求は、新しいものを創り出す中から生まれる「第3の文化 (the third culture)」の追求と重なる可能性を感じた次第である。(木村松雄・青山学院大学)

#### ■研究発表・実践報告・ワークショップ■

##### #01. 研究発表A 09:30~10:00

中国の英語教育がめざすもの — 初等・中等英語教科書に見える中国文化 English Education Aims in China: Chinese Culture in Elementary and Secondary School English Textbooks

西蔭浩子 (大正大学)

岡野恵 (大正大学)

平石淑子 (日本女子大学)

2001年に小学校英語の必修化をしている中国の教科書を日本と比較して分析した研究。人物の英語名の数が日本の約8倍もある点、精選した構文を暗記させロールプレイ等で徹底練習させている点、読解教材で中国文化と欧米文化とがバランスよく取り上げられている点を踏まえると、中国の英語教育理念は自国意識の強い自己宣伝型のように通常は思われがちだが、具体的な教科書から見てとれる実態としては「異文化受容型」であると言える。(河内山晶子・明星大学)

##### #02. 研究発表C 10:05~10:35

異文化間における認知スタイルの違いの理解の活用 Teaching Production Skills through Understanding Differing Perception Styles between Cultures

松岡みさ子 (大妻女子大学)

日本人と英語母語話者とでは事象の認知のし方が違うということを踏まえて、相手の認知スタイルに合わせた説明をしていくという表現の指導を試みた授業報告。写真を説明する際、文化に

よる認知の差、例えばアジア的な「全体重視」より「目立つもの(個)」を中心に述べる等の工夫をし、単語力や文法力を補うものである。発表者の考えた理論に基づき授業を担当した共同研究者の報告では、学習者の反応はおおむね良好とのことである。(河内山晶子・明星大学)

##### #03. 実践報告A 09:30~10:00

行間を読む授業—経済・経営の英語 How to Pick up What are in the Spaces between the Lines: English for Economics and Business

中原功一朗 (関東学院大学)

本発表は、大学の一般教養の英語科目として、文法・読解能力の向上と経済・経営の基礎知識の確認を目指したESP的な要素を持った授業実践の報告であった。その特徴として、教材としてのテキストの「経済の専門的な分野」について、関連部分の解説を充実させて指導を行っている。(清田洋一・明星大学)

##### #04. 研究発表D 10:05~10:35

Analysis of Text Readability and Item Categorization in Placement Tests

Nakamura, Yuji (Keio University)

Murray, Adam (Miyazaki International College)

Shimada, Kazunari (Takasaki University of Health and Welfare)

いわゆる大学のプレースメントテストにおける読解能力の評価における研究発表である。方法として複数のプレースメントテストのリーディング問題の設問方法や題材、使用語彙などの分析を行った。結果として、リーディングの難易度を決定するのは題材ジャンルではなく、むしろその題材に付随する設問によることが判明した。(清田洋一・明星大学)

##### #05. 研究発表H 10:40~11:10

TOEIC は企業が求める英語力を測定しているか  
Does TOEIC Adequately Measures English Proficiency of Corporate Employees

戸田博之 (東京大学・大学院生)

英文ビジネスメールを書く能力と TOEIC とのスコア (RL) とを比較する研究発表が行われた。英文ビジネスメールを書く能力については、10名の評価者が、①目的の達成、②論旨一貫したわかりやすさ、③明快さ、④簡潔さ、⑤正確さ、⑥情報の過不足のなさ、⑦読み手への配慮について判断したものの平均で調べた。TOEIC スコアと英語使用機会の多さとの関係や、TOEIC 受験回数観の観点からも分析がなされた。質疑も活発であった。(山口高領・早稲田大学)

#06. 実践報告 F 11:15~11:45

インプット洪水とゲームによる TOEIC リスニングアプリの開発 TOEIC Listening Web App with Input Flood and Gamification

湯舟英一 (東洋大学)

発表者の湯舟英一先生と峯慎一先生との共同開発の web で使えるリスニングアプリの実践報告であった。このアプリは、音声によるインプット洪水をゲーム感覚で学習者が試すことができるよう、制限時間や正答率などを基に学習者が獲得できるメダルが異なるといった工夫がされたものだった。質疑も活発に行われた。アプリは、<http://www.planetmedialab.com/>にて試すことができる。(山口高領・早稲田大学)

#07. 研究発表 B 09:30~10:00

English Speaking Countries through the Eyes of Japanese Language Students

Shimazu, Shigeko (Tamagawa University; part-time)

本発表では、工学専攻の大学生と大学院生に対して実施したインタビューより得られた回答を質的に分析した。What is your image of English

speaking countries? という質問を男子 8 人、女子 6 人の参加者にした時の回答を肯定的、否定的、中立的の 3 種類に分類した。参加者の英語学習やコミュニケーションスキル、日本人としてのアイデンティティーに影響を与えるなど、英語学習者が英語圏の国に対し持つイメージは多岐にわたることを示唆する発表である。(武田礼子・青山学院大学)

#08. 研究発表 E 10:05~10:35

Qualitative Approach on Cultural Diversity at a Bilingual University

Fukuda, Tetsuya (International Christian University)

発表者は日英 2 か国語で授業を開講する大学に在籍する 1 年生を対象に、3 種類の調査法を実施した。その一例として、求めた国際的な交友関係が大学で得られない在日韓国人の男子学生、また大学に進学するまで英語を積極的に話さなかった通訳希望の女子学生とのインタビューが紹介された。日英 2 か国語が共通言語の大学でも、学生の過去の経験が、文化や英語に対して彼らが持つ現在の複雑な感情と心を浮き彫りにした発表だった。(武田礼子・青山学院大学)

#09. 招待講演 10:40~11:45

グローバル化時代の英語教育—異文化間コミュニケーション能力育成の意義と課題— Intercultural Communicative Competence and Teaching English as a Foreign Language in the Globalized World

中山夏恵 (共愛学園前橋国際大学)

栗原文子 (中央大学)

発表の要旨を以下の 4 点に絞り込み、前半 1. 2. を中山氏が、3. 4. を栗原氏が発表された。1. 日本の英語教育において育成されるべきコミュニケーション能力の目標、2. (異)文化間能力とその育成の重要性：ヨーロッパ (CEFR、

FREPA、EPOSTL)、ニュージーランド (iCLT)、  
3. 日本における現状と実践 (教員の意識調査と教科書調査)、4. (異)文化間コミュニケーション能力育成の意義と課題。2015年1月10日(土)青山学院大学にて2014年度第5回青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会が開催されたが、その時の講師が中山夏恵氏と栗原文子氏であり、演題は「グローバル時代に求められる異文化間能力—英語授業における現状と課題」であった。この講演の反響は大きく、改めて聞きたいという大方の声が寄せられていた。大会テーマ「統合型英語教育における異文化間多様性」を決定する際に、気鋭の研究者による招待講演でまず異文化間コミュニケーション能力の定義とその必要性について学び、その上で全体シンポジウムに参加し碩学のお考えを聞くことができ、大会テーマにより深く接近できることを想定し、招待講演と全体シンポジウムが共に連動することを試みた。中山氏と栗原氏の発表は、好評であった共催講演会の内容をさらに充実したものとなっていて、グローバル化時代に必要なコミュニケーション能力は、「外国語運用能力(4技能)」だけでなく、「文化間能力(Intercultural Competence)」が必要であり、これを加え5技能の習得がこれからの外国語教育の目標として位置付けられなければならないとし、その具体的方法論の紹介にまで至る包括的かつ詳細なもので聞く者を十分に納得せしめた。会場には入りきれず廊下にまで立ち見が出る盛況ぶりであった。本招待講演にて「異文化間能力」への意識が大きく前進したことを参加者の多くは確信されたと思う。大きな足跡を残された中山氏と栗原氏に衷心より御礼申し上げたい。(木村松雄・青山学院大学)

#### #10. 実践報告B 09:30~10:00

英字新聞を使用したオーラルプレゼンテーション活動:「実践共同体」の視点から学びを捉える

#### Oral Presentation Activities Using English Newspaper: From the 'Community of Practice' Perspective

峰松和子 (津田塾大学・大学院生)

本発表では、英語を外国語として学ぶ環境において、英字新聞を使用したオーラルプレゼンテーション活動は、「実践共同体 (Community of Practice)」の学びを創りだせるかというテーマで実践報告がされた。具体的には、大学1年生のリーディングのクラスにおいて、オーラルプレゼンテーション本番にむけたペア練習、実際の発表、発表の観察、自己及び他者の評価を行う中で、「解釈、検証、問題解決、相互構築」といった学びが起きていることを示した。本発表の中で、「この活動がリーディング能力の育成にどう関係するのか」あるいは、ペア練習の際に「教員がどの程度、学生の支援に携わっているのか」等の質問が参加者から挙げられた。(飯田敦史・群馬大学)

#### #11. 実践報告E 10:05~10:35

英字新聞を用いたアクティブ・ラーニングの授業形態の比較 Comparison of Different Teaching Methods of Active Learning Using English Newspapers

中井文子 (東洋大学)

本発表では、アクティブ・ラーニングに関する事例研究が報告された。発表者は、アクティブ・ラーニングを導入した学習、講義形式とアクティブ・ラーニングを混成した学習、講義形式の学習の3つの異なる学習形態が初級レベルの日本人英語学習者の読解能力向上にどのような影響を与えるのかを議論した。ポスター・プレゼンテーションを用いたアクティブ・ラーニング群が読解能力に改善が見られたが、学習者の習熟度と教材の難易度が一致していないのではないかという指摘が会場からあった。(飯田敦史・群馬大学)

#### #12. ワークショップ 10:40~11:45

Drama in Education: Using Well-known Japanese Tales as Pre-texts

Shiozawa, Yasuko (Bunkyo University)

Saito, Aiko (Setsunan University)

Moody, Miho (Nagoya University of Foreign Studies)

Kusanagi, Yuka (Gunma University)

Yoshida, Mariko (Tsuda College)

発表者らは、ドラマを教育に活用する“DIE (Drama in Education)”について概説し、その上で小噺や童話を下敷き (Pre-text) とした、即興を伴う次の3つの活動を紹介し、参加者 (約20名) に体験していただいた。①落語のマクラを創作して演じる、②童話の葛藤場面を登場人物になって演じる、③童話のエンディングを自由に改変して演じる。フロアの積極的な参加が得られ、協働を促し、創造性や批判力を養うDIEの将来性が示唆された。(塩澤泰子・文教大学)

#13. 実践報告C 09:30~10:00

Overlooked Motivational Strategies: Test Scoring Methods

Kawashima, Tomoyuki (Gunma University)

学習者の動機付けを意識した評価方法、そして、動機を低下させる要因に関して、空所補充や訳を問うテストと質問紙をもとに分析した結果を本発表で提示した。その結果の一つでは、本研究で用いたスコア付けの方法を使用した場合、学習者の動機付けに貢献できる可能性が示され、また、達成感を学習者が感じやすいという利点が明らかになった。改めて、現在のテスト評価の方法を再考する機会になったのではないか。(辻りこ・青山学院大学)

#14. 研究発表F 10:05~10:35

Challenges Concerning Integrated-skills EFL Test and Assessment: Operationalizing Assessment Production Cycle with Diverse Teacher Beliefs

Miyazaki, Kei (Keio Gijuku High School)

Tsuchihira, Taiko (Seitoku University)

Matsumoto, Kahoko (Tokai University)

本研究発表では、技能統合型テスト開発に着目し、現在の日本の英語教育の中で統合したテストを作成する事、そして技能統合型の教育目標を構築していく事が適切な学習指導と学習者評価へと繋がることを提案した発表であった。前半では、EFL教師から得た教室での課題を取りあげ、後半では、技能統合型テスト開発の取り組みを示し今後の英語教育評価を考える上で、短い時間であったが多くの示唆を与える発表であった。(辻りこ・青山学院大学)

#15. 実践報告D 09:30~10:00

全学共通カリキュラムにおける英語発音指導ーニーズ分析と授業実践報告 Pronunciation Instruction for Non-English Majors: Needs Analysis and Course Implementation

三谷裕美 (獨協大学)

辻田麻里 (獨協大学)

この発表は、非英語専攻学生対象の「発音」というクラスに関しての実践報告であった。学期初めに130語程度の英文を朗読させ、学生による自己評価アンケートを実施し、学期末にも同一の英文を朗読させ、適正発音率の変化を観察した。学生が「母音・子音を適確に発音すること」を改善点とする一方で、実際には学生のエラーは、超分節の要素において顕著であったという報告であった。発表後には、発音率の変化等に関しての活発な質疑応答が行われた。(遠藤雪枝・昭和大学)

#16. 研究発表G 10:05~10:35

Scaffolded Timed Speaking Grid: Developing Academic Speaking Fluency for Science Majors

Uehara, Suwako (University of Electro-Communications)

発表者はワークシートを使用して、理系学生の

スピーキングの流暢さの育成を試みた。学生はワークシートにトピック・センテンス、メイン・ポイント、メイン・アイデアのサポートや結論についてキーワードやフレーズを書き、その情報に基づき短い口頭発表をし、最後に何も見ず発表を行った。半期毎回これを行い最後にアンケートをとったところ、学生の評価はよかった。(佐竹由帆・駿河台大学)

#### #17. 研究発表 I 14:35~15:05

A Comparative Study of Content-Based Language Teaching at Universities and International Preschools in Japan

Butterfield, Jeffrie (Kanagawa University; graduate student)

大学とイマージョン教育をしている幼稚園の両方で指導している発表者が、大学の授業でも幼稚園のように content-based な授業をもっと行うべきであり、そのための教材を開発すべきであると主張した。質疑では大学での指導についての意見交換、特に教材・テキストを content-based にし、もっと魅力的にすべきだという意見の他、子どもはどれくらい経つと英語を話し始めるのかなどイマージョン幼児教育についての質問も出された。(長田恵理・國學院大學)

#### #18. 研究発表 L 15:10~15:40

学習プロセスへの認識の深化は、学習にどんな影響を与えるのか—「学ぶ力」の育成にむけて

How the Deepening of Learner's Acknowledgement of their Learning Process Affects their Learning?: Toward the Development of "Learnability"

河内山晶子 (明星大学)

大学生約 800 名に対する質問紙調査により、学習を促進させる基盤的存在は動機づけ・自信・モニタリングであることがわかった。中でも自分の学習過程のモニタリングが中核的要因だという知見から、計 6 名に施した個人指導を質的に分析

したところ、「学習過程を意識的に捉える」ことが他の学習分野やひいては日常生活にも変化が見られた。現在多くの大学で設置されている個別の学修相談への回答方略に示唆を与える発表であった。(長田恵理・國學院大學)

#### #19. 研究発表 J 14:35~15:05

A Comparative Study of Student Multiple Intelligences: Pedagogical Implications for ESP Classes

Yamauchi, Darlene (Niigata University of Health and Welfare; part-time)

Multiple Intelligence に関する質問紙調査とその調査結果に基づく指導について御発表がなされた。Multiple Intelligence の概念についての説明が丁寧になされたため、多くの学生も拝聴していたが、質問紙の内容についての理解が深まり、英語による議論も活発に行われた。(中井文子・東洋大学)

#### #20. 研究発表 M 15:10~15:40

Development of a Level-specific Test Based on the CEFR-J Reading Scale

Fujimura, Tomoko (Kanda University of International Studies)

Sugita, Megumi (Kanda University of International Studies)

入学前と卒業時にいかに学生の読解能力が向上したのかについて調査するためのテスト開発についての御発表が行われた。そのテストは CEFR-J に基づくものであった。会場からは、カリキュラムの内容と関連付けてテストを開発してはどうかというご提案があった。会場から発表者に多角的な視点からのフィードバックがあり非常に有意義なセッションとなった。(中井文子・東洋大学)

#### #21. 実践報告 G 14:35~15:05



日米文化比較を使った異文化適応の英語授業について  
ESL Class for Cross-cultural Adaptation  
Based on Japan-U.S. Cultural Comparison

大味潤（尚美学園大学・非常勤講師）

本発表は、発表者自身の米国滞在経験をもとに、日米文化の比較を題材とした日本の大学生向けに英語の会話指導の実践報告である。教科書に沿った指導に終始するのではなく、これまで学生たちが受けた英語の授業のあり方に一石を投じるものである。ひとつのシチュエーションを指導するにしても、学生たちができるまで徹底的に指導される様子を聞くと、学生たちも自信が付き、「なりきり」でやる気が出る様子が想像できる。（武田礼子・青山学院大学）

#22. 研究発表N 15:10～15:40

日本人女性の大学英語教師の変遷 Japanese  
Female EFL University Teachers in Transition  
吉原令子（日本大学）

本発表は、発表者自身が会社を退職してから大学英語教師になった経緯をもとに、別の職業から大学院で英語教授法等を勉強し、大学英語教師になった女性たちのナラティブ研究である。転職のみならず、教師として仕事をすることで教師のアイデンティティーが形成される様子がインタビューのデータに表れている。質疑応答では発表者からの質問で、多くの大学が手探りで英語教師のFDを行っていることも判明した。（武田礼子・青山学院大学）

#23. 実践報告H 14:35～15:05

指導実践における教育用例文コーパス SCoRE の  
評価 Evaluating the Sentence Corpus of  
Remedial English for Level Appropriateness  
and Usability in the EFL Classrooms

中條清美（日本大学）

若松弘子（筑波大学・大学院生）

検索ツールを用い言語の規則性を発見するデ

ータ駆動型学習で使える初・中級英語学習者向けの適切な難易度のコーパス不在を受け、日英対照可能な著作権フリーの教育用例文コーパス（SCoRE）が発表者らにより開発された。大学・高専の英語クラスでの実践例が紹介、学習効果および学生の反応が報告された。この指導法はCALLの設備がなくても可能で、このSCoREを利用することにより、文法学習をよりアクティブな学習へと転換できる方法が示された。（川口恵子・芝浦工業大学）

#24. 研究発表O 15:10～15:40

上級英語学習者誤用コーパスに基づく日英語空間表現の対照  
Comparative Studies on Spatial  
Representation in English and Japanese Based  
on the Advanced Learners' Corpus of English

望月圭子（東京外国語大学）

Newbery-Payton, Laurence Christopher（東京  
外国語大学・大学院生）

東京外国語大学におけるプロジェクト「オンライン英作文学習コーパス・誤用辞典」で顕著な誤用項目である前置詞のうち、中国人学生に比べ日本人学生に誤用が多い「in」の過剰使用について具体例およびその原因（中国語と日本語の表現の差異）が論じられた。誤用分析の対象は、東京外国語大学および台湾、中国の大学生、上級英語学習者による英作文コーパスである。この「誤用辞典」試用版は大学のHPにて公開されているので、ぜひ利用されたい。（川口恵子・芝浦工業大学）

#25. 研究発表K 14:35～15:05

インタラク션을促す文法学習の紹介ーディ  
クトグロスの効果的活用 Effective Use of  
Dictogloss in Teaching Grammar Interactively

山本成代（創価大学）

発表者はディクトグロスという活動に注目し、その理論的背景と大学の授業での効果について語った。ディクトグロスは、一方通行になりがち

な文法学習を学生参加型授業へと発展させ、学生達が自発的に文法を考える効果的なツールとなり、教材の工夫等で様々なレベルのクラスで活用できると説明した。また、フォーカス・オン・フォームの観点からの有効性にも触れた。発表後も多くの質問があり、教員のディクトグロスへの関心の高さがうかがわれた。(奥切恵・東京医療保健大学)

#26. 研究発表P 15:10~15:40

The Effects of Two Types of Output-input Activities on Vocabulary and Grammar Learning: A Comparison of Text Reconstruction and Summary Writing

Fujii, Akiko (University of the Sacred Heart)  
Iwata, Yumiko (University of the Sacred Heart; graduate student)  
Matsueda, Rina (University of Leeds; graduate student)

第二言語のアウトプットの方法によって、語彙と文法、さらに意味と言語形式の習得度が違うかどうかを調査した興味深い研究の発表であった。学習者は絵本を3回聞きながら2種類のライティングアウトプット活動を行った。その結果、アウトプットの方法によって文法の学習に違いが見られ、文法への気づきなどが要因の可能性として報告された。発表後もたくさんの質問があり、聴衆の文法習得への関心の高さがうかがわれた。(奥切恵・東京医療保健大学)

#27. 実践報告 I 14:35~15:05

The Effects of Group Works with Language Consultants on Language Learning and Motivation

Yamamoto, Hiroki (Graduate School at Meiji University; graduate student)  
Izumisawa, Makoto (Graduate School at Meiji University; graduate student)

日本の大学の英語授業において、language consultant (LC) をグループワークに活用した効果が報告された。授業では、2種類のタスクが用いられ、3、4名のグループの1人をLCとして、他のグループのメンバーにフィードバックが与えられた。その結果を主に産出言語の正確さと動機づけの観点から分析したところ、両方の面で効果が見られた。また、発表後、本実践の細部や分析方法などについて活発な質疑応答が行われた。(嶋田和成・高崎健康福祉大学)

#28. 研究発表Q 15:10~15:40

A Rasch Analysis of L2-English Achievement Goals

Richard, Jean-Pierre Joseph (Tokyo Woman's Christian University)

達成目標理論 (achievement goal theory) の枠組みに基づき、日本人大学生の英語学習に対する4つの達成目標に関する質問紙調査の分析結果が報告された。調査の結果、学習者は自分の能力をさらに向上させたいと考える mastery-approach goals が、他の達成目標よりも有意に高く、特に英語語彙力の低い学習者にその傾向があることがわかった。また、発表後、本研究で用いられたラッシュモデルによる分析などについて活発な質疑応答が行われた。(嶋田和成・高崎健康福祉大学)

**第1回支部総会報告**

支部事務局幹事

高木亜希子 (青山学院大学)

2015年7月12日(日)に、青山学院大学17号館本多記念国際会議場に於いて、2015年度第1回支部総会が開催されました。支部総会では、2014年度事業報告・会計報告、2015年度事業計画についての説明が行われました。以下に内容を記載いたします。なお、会計報告は省略します。

## ■2014 年度事業報告■

### I. 大会、セミナー等の開催 (1 号事業)

#### (1) 支部大会の開催

名称：2014 年度関東支部大会

日時：平成 26 (2014) 年 6 月 29 日 (日)

場所：青山学院大学

規模：約 300 名

#### (2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育センター・JACET 関東  
支部共催英語教育講演会

場所：青山学院大学・早稲田大学

規模：毎回 50~90 名

日時と内容：

- ・平成 26 年 4 月 12 日 (土) 池田真 (上智大学)  
「CLIL が切り拓く日本の英語教育」
- ・平成 26 年 9 月 20 日 (土) 佐野富士子 (横浜国立大学)「SLA 最前線：英語教師に必要な第二言語習得」
- ・平成 26 年 10 月 11 日 (土) 小張敬之 (青山学院大学)「CALL 研究最前線：クラウド環境の中で学ぶ反転授業とブレンド型の英語教育 -Dominus illuminatio mea-」
- ・平成 26 年 12 月 13 日 (土) 酒井英樹 (信州大学)「第二言語習得研究からみた英語指導：インプット、インタラクション、アウトプット、フィードバックの観点から」
- ・平成 27 年 1 月 10 日 (土) 中山夏恵 (共愛学園前橋国際大学)・栗原文子 (中央大学)「グローバル時代に求められる異文化間能力ー英語授業における現状と課題」

#### (3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

場所：青山学院大学・早稲田大学

規模：毎回約 50 名

日時と内容：

- ・平成 26 年 5 月 10 日 (土) 藤尾美佐 (東洋大学)  
「言語能力とコミュニケーション能力の落差：  
コミュニケーションを成功に導く能力とは？」

- ・平成 26 年 7 月 12 日 (土) 川成美香 (明海大学)  
「グローバルな英語コミュニケーション能力の到達基準を求めて：CEFR 準拠の JS「ジャパン・スタンダード」の策定と実践」

- ・平成 26 年 11 月 8 日 (土) 齊藤一弥 (早稲田大学)「日本人英語学習者が目指すべきスピーキング能力とは何か：発音・流暢さ・語彙・文法の観点から」

### II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行 (2 号事業)

(1) 『JACET 関東支部紀要』第 2 号 (英語名：JACET-KANTO Journal )

日時：平成 27 (2015) 年 3 月 31 日

規模：約 1100 冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第 3・4 号

日時：①平成 26 (2014) 年 10 月 8 日

②平成 27 (2015) 年 3 月 31 日

※JACET 関東支ホームページに pdf で掲載

### III. その他 (5 号事業)

#### (1) 支部総会の開催

名称：2015 年度第 1 回、第 2 回関東支部総会

日時：①平成 26 (2014) 年 6 月 29 日

②平成 26 (2014) 年 11 月 8 日

場所：青山学院大学

目的：①2013 年度の支部の事業報告、会計報告  
2014 年度の支部の事業計画

②2015 年度の支部の事業計画、予算案  
および人事案の審議

#### (2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：平成 26 年 4 月 12 日、5 月 10 日、7 月 12 日、  
9 月 13 日、10 月 11 日、11 月 8 日、12 月  
13 日、平成 27 年 1 月 10 日、3 月 13 日

場所：青山学院大学・早稲田大学

■2015 年度事業計画■

I. 大会、セミナー等の開催 (1 号事業)

(1) 支部大会の開催

名称：2015 年度関東支部大会

日時：平成 27 (2015) 年 7 月 12 日 (日)

場所：青山学院大学

規模：約 300 名

(2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育センター・JACET 関東支部共催英語教育講演会

日時：平成 27 (2015) 年 4 月、9 月、10 月、12 月、平成 27 (2015) 年 1 月の 5 回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 50~90 名

(3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

日時：平成 27 (2015) 年 5 月、6 月、11 月の 3 回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 40 名

II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行 (2 号事業)

(1) 『JACET 関東支部紀要』第 3 号 (英語名：

*JACET-KANTO Journal*)

日時：平成 28 (2016) 年 3 月 31 日

規模：約 1150 冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第 5・6 号

日時：①平成 27 (2015) 年 9 月 30 日

②平成 28 (2016) 年 3 月 31 日

目的：支部活動の動向や支部会員への英語教育に関する情報提供と情報交換を行う。

※JACET 関東支部 HP に pdf で掲載

III. その他 (5 号事業)

(1) 支部総会の開催

名称：2015 年度第 1 回、第 2 回関東支部総会

日時：①平成 27 (2015) 年 7 月 12 日

②平成 27 (2015) 年 11 月 14 日

場所：青山学院大学

目的：①2014 年度の関東支部の活動、会計報告、および 2015 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案を示す。社員選挙についての説明を行う。②2016 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案の審議・承認を行う。

(2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：平成 27 (2015) 年 4 月、5 月、6 月、9 月、10 月、11 月、12 月、平成 28 (2016) 年 1 月、3 月

場所：青山学院大学

目的：支部の運営における審議、計画の立案を行う。

月例研究会報告

月例研究委員会委員長

山本成代 (創価大学)

■月例研究会 5 月報告■

日時：2015 年 5 月 9 日 (土) 16:00-17:20

場所：青山学院大学総研ビル (14 号館) 10 階第 18 会議室

題目：「効果的な第二言語語彙学習方法を目指して」  
講師：中田達也（関西大学）

本発表では、対連合形式の第2言語語彙学習を促進する要因について、主に3つの実証研究に基づき報告された。対連合学習とは、L2の語形をその意味（母語訳や定義）と結び付ける学習法のことである。

まず、「テスト」と「学習」の及ぼす影響について調査した研究（Karpicke & Roediger, 2008, *Science*）が紹介された。学習とテストの回数を操作して実験を行った結果、長期記憶に影響を与えるのはテストの回数であることが明らかになった。記憶をテストすることによって学習が促進されることから、テスト自体にも学習効果があることが報告された。

研究2（Nakata, in press, *SSLA*）では、分散学習を行う際の単語の学習間隔と保持間隔に注目し、ある学習項目を一定の間隔で繰り返す「均等分散学習」と、学習が進むにつれて、学習間隔を徐々に長くする「拡張分散学習」とでは、どちらが効果的かを調査した。まず先行研究で、結果が一致しない3つの要因（①学習後に正解が与えられない時、②学習間隔が長い時、③保持間隔が24時間よりも短い時）を分析し、それを考慮した上で被験者を集中学習群と、異なる学習間隔（短・中・長）群に分類した。更に、学習間隔ごとに、均等・拡張分散学習に分類し、計7種類の条件に割り当てた。結果、均等分散学習と、拡張分散学習の効果には、ほとんど差が見られなかった。また、集中学習は、短期的にも長期的にも最も学習効果が低かった。学習間隔は、長くなるほど、特に長期的な保持を促進する上で効果的であることが報告された。

研究3（Nakata & Webb, in press, *SSLA*）では、たとえば20の英単語をまとめて繰り返し学習する（全体学習）のと、いくつかに分けて繰り返す（部分学習）場合の学習効果についての比較

調査が行われた。先行研究では、学習間隔が考慮されていない点を指摘し、それを統制した上でこの2種の学習方法（全体 vs. 部分）の効果を調査した結果、学習間隔が統制されていれば2者の学習効果に差は見られなかった。学習間隔を考慮することの重要性が示唆された。

限られた時間で最新の研究成果を詳細に伺う良い機会となった。明日からの語彙指導を考える上で多くの示唆に富むご発表だった。

### ■月例研究会 6月報告■

日時：2015年6月13日（土）16:00-17:20

場所：青山学院大学総研ビル（14号館）10階第18会議室

題目：「CLILの理論と実践—フィンランド海外教育実習をとおして—」

講師：柏木賀津子（大阪教育大学）

CLIL（内容言語統合型学習）の理論と実践について、大阪教育大学で実施している2週間のフィンランド海外教育実習という具体例を通して語られた。まず、CLILを活用した理科などの授業を、実施する半年前からどのような準備が必要か、また授業の実例として、教育専攻と物理専攻の学生たちが教員役として共同で行った具体例が紹介された。そこでは、物理学で教員が紙飛行機が飛ぶ仕組みを説明したり、生徒たちが紙飛行機をいかに飛ばすかを議論したりする中で、英語が活発に使用されていることがわかった。理科の授業中に、生徒たちがクラス内でどのような言語を習得・使用しているかをディスコース分析し、どのような英語が授業内で学習されていくかについても報告された。

CLILの取組みにおいて、教員は事前に授業準備を十分にすることが大切であり、授業中に使用する目標表現の文構造（Language Frame）を予測し、積極的に授業に取り入れることによって、習得を促進する操作をする（Input Frequency）。

そうすることにより、生徒が英語の文構造に気づくチャンスを高めることができる（Focus on Form）。また生徒も意図的に取り入れられた文構造や表現を模倣したり繰り返したりすることによって、認知的に言語を習得し内在化できる（Usage-based Model）という理論に基づいたメリットがある。さらにディスコース分析によって、授業中に教師のプランした目標表現や文構造を実際に生徒が使用していたり、生徒同士で corrective feedback をしたりしていることも明らかとなった。英語習熟度の高くないクラスでも、教師が簡単な英語表現を複数提示し選択肢を与えることにより、生徒の発話を促したりすることができることも報告された。授業前後で構文、語彙、流暢性、発音についての英語力を測ったところ、統計的にも有意に構文の習得が進んでいたこともわかった。事後調査で、生徒たちは CLIL が認知操作として高いため、難しいが興味を持つことができ、授業作りが楽しいと感じていることも報告された。

講演では、算数や光の屈折と虹の作り方などの CLIL の授業の実演があり、聴衆も参加し CLIL を楽しんだ。同時に、いつの間にか目標表現を使っていることを聴衆が実感でき、CLIL のこれからの様々な場面での使用についての興味深い研究会となった。

## 青山学院英語教育研究センター・JACET

### 関東支部共催講演会報告

支部会員

辻りこ（青山学院大学大学院生）

支部事務局幹事

高木亜希子（青山学院大学）

## ■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第1回）報告■

日時：2015年4月11日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学総研ビル（14号館）10階

## 第18会議室

題目：「学校英語教育における CAN-DO リストの課題」

講師：高田智子（明海大学）

本共催講演会では、「学校英語教育における CAN-DO リストの課題」と題し、検定教科書を使う英語授業のための CAN-DO リストの作り方とその課題、活用方法に関してご提案があった。

前半では、CAN-DO リストの概念が詳細に示された。2013年に文部科学省は『各中・高等学校における「CAN-DO リスト」形での学習到達目標設定のための手引き』を提示している。この年初めて、国際基準で英語学習目標が、CEFR基準で示され、一貫して英語を用いて何ができるか、ということ意識して学習到達目標を設定することが文科省の公表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」の中で具体化された。高田先生の御講演では、文科省が示す事を具現化する方法について解説された。

本講演の後半では、指導と評価が実際にどのようにされているのかを、CAN-DO の作成・活用を行っている千葉県 CAN-DO リスト研究協議会の例をもとに示された。この協議会に参加された先生方は、意見交換を踏まえながら、CAN-DO リストを作成し、授業の改善を実施したと報告頂いた。研修会では、教員全員で意見交換をし、指導主事はその意見をカテゴリー化した上で、疑問などに直接答えるということがなされた。このような研修会の特徴として、年次進行で全県に広げる、継続的な研修である、そしてプロセスを重視しているということが挙げられた。学校関係者の言語能力に関する理解は一律ではなく、作成段階から、教員が共有することで、「同僚性」を高めることができたということも特徴の一つとして挙げられた。

今後の課題の一つは、何の為の CAN-DO リストなのかを明確にすることであると、高田先生か

らご指摘があった。CAN-DO リストを作成するプロセスの中で、教師側の意識改革、「同僚性」を高めることを再認識することが重要とのことである。加えて、リスト作成や活用、CAN-DO 作成のプロセスに関する研究がこれから必要である。質疑応答においては、CAN-DO リストと文化の扱いに関してなど、多くの活発な意見交換も交えた講演会となった。(辻りこ・青山学院大学)

### ■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会 (第 2 回) 報告■

日時：2015 年 9 月 12 日 (土) 16:00-17:30

場所：青山学院大学 17 号館 5 階 17506 教室

題目：「教育に ICT を使う意味」

講師：杉本卓 (青山学院大学)

近年、英語教育のみならず教育の全ての分野において、ICT 化が進められ、アクティブ・ラーニングなど学習者を主体とした学習活動形態が推奨されている。本講演では、教育工学の立場から、学習と ICT 活用に関する過去約 30 年の学習科学・認知科学の研究成果を概観され、英語教育への適用について考察された。

従来は、行動主義の考え方を背景に Computer Assisted Instruction (CAI) としてコンピューターが教育利用されていた。近年は、社会構成主義の考え方にに基づき、Computer Supported Collaborative Learning (CSCL) として利用されている。学ぶことは、知識の獲得ではなく知識を再構成することであり、教えることは、知識構築を支援する過程である。つまり、知識を構築するために現実世界と関わりながら協働で学ぶことが目指すべき教育の方向であり、新しい学習観として学習の仕方を知ることが究極の目標である。したがって、新しい学習観におけるメディアの役割は、単に知識や情報を伝えるものだけでなく、自ら選び考えながら情報を得て、仲間と協働で知識を構築し、コミュニケーションを行う思考

と探究の道具である。

英語教育では、視聴覚教材として、個別学習システムとして、また協働学習のツールとしての 3 種類の ICT の活用が考えられる。従来の技術と比較すると、現在の ICT は音声・映像の提示方法に多様性や柔軟性がある。また学習の履歴・記録の管理が容易であり、学習者に学習過程を振り返ることを促すことができる。杉本先生は、ICT を活用する意味について、既に 30 年前から、社会構成主義的な視点に気づいておられ、「教育の原点に立ち戻って、本来望ましいと考えられてきたがこれまで様々な制約の中ではできにくかったような教え方や学び方を支援するためにコンピューターを使う方法を探るべき」(三宅・杉本、1985) と述べておられた。本講演では、改めて教育の原点に立ち戻り、ICT を使う意義について深く考察した上で、英語教育において学習者にとって最も意味のある活用方法を探究していく重要性を認識した。(高木亜希子・青山学院大学)

### 支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長

伊東弥香 (東海大学)

紀要編集委員会では、2013 年度より「関東支部紀要 (JACET-KANTO Journal)」を年 1 回発行しています。本年度は第 3 号です (2016 年 3 月発行予定)。支部会員の研究活動を奨励し、研究の質向上に寄与するため、4 月より新しいメンバーを迎え、今まで以上に活発な討議を繰り返しながら委員会の体制強化を図り、様々な仕事に取り組んでいます。

6 月には、支部ウェブサイト「*JACET-KANTO Journal* Vol.3 Call for Papers」をアップし (<http://www.jacet-kanto.org/journal/submission/index.html>)、紀要投稿のための詳細な情報を公開しました (論文種別、審査評価項目、紀要で扱う主な専門分野、スケジュール、投稿規程、日本

語テンプレート、英語テンプレート)。また、7月には「査読システム (peer review system)」登録者の情報更新、および新規査読者の登録を行いました。本システムを確立することにより、色々の分野やアプローチによる論文に対応できるようにするのみならず、投稿者と査読者がお互いに学び合う機会の創出にも役立つものと考えています。

第3号は、7月20日に応募原稿を締切り、査読者の選定を経て第1次審査(8月～9月)が進行中です。今後、年内に審査(10月～12月)を終了し、採択論文の編集・校正作業(1月～2月)が続きます。

紀要編集委員会メンバー：伊東弥香(委員長)、今井光子、大野秀樹、長田恵理、小田眞幸(副委員長)、熊澤孝昭、武田礼子、濱田彰、古家貴雄、星野由子、Chad Godfrey、Paul McBride(敬称略、50音順)

### 事務局だより

#### 支部事務局幹事

高木亜希子(青山学院大学)

#### ■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会及び月例研究会開催のお知らせ■

下記のとおり、共催講演会及び月例研究会を実施いたします。多くの皆さまの参加をお待ちしております。詳細は支部 HP、支部会員 ML でお知らせいたします。

#### (1)2015年度第3回共催講演会

日時：2015年10月10日(土) 16:00-17:30

場所：青山学院大学 17号館 6階 17606 教室

題目：「再考：英語教育を通して育てたい学ぶ力とは何か？」

発表者：清水公男(文京学院大学)

#### (2)2015年度月例研究会(11月)

日時：2015年11月14日(土) 16:00-17:20

場所：17号館 4階 17406 教室

題目：「夜間定時制高校生にとっての英語学習の意味：事例研究を通じた検討の試み」

発表者：田中祥子(東京大学・院)

#### ■住所変更届提出のお願い■

支部会員の皆様に、支部大会のご案内や支部紀要を確実にお届けするために、転居の際には、JACET 本部事務局へ住所変更届けを提出していただきますよう、どうぞよろしく願いいたします。

### JACET-Kanto Newsletter 第5号

発行日：2015年9月30日

発行者：JACET 関東支部(支部長 木村松雄)

編集者：佐野富士子、下山幸成、斎藤早苗、川口恵子

発行所：〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

青山学院大学文学部英米文学科

木村 松雄 研究室内